

# ITI Scholar NEWS

## vol.12 (2023, November)

### ITI Section Japan



## ITI スカラー通信第 12 号をお届けします

今回の通信では、2022 年 9 月より Zurich 大学にて開始されました東京医科歯科大学大学院歯周病学分野ご出身の福場駿介先生からのレポートとなります。

1 年のスカラー留学を終えられたということで、総括としてのレポートをご報告いただきます。  
よろしくお願い申し上げます。

## 福場駿介先生 University of Zurich (Zurich, Switzerland)

2022年9月よりITI Scholarとしてチューリッヒ大学に留学しておりました福場駿介と申します。  
おかげさまで1年間のITI Scholarshipを無事に終えることができました。

時が経つのは早いもので、日本に帰国してもう2ヶ月が経とうとしております。

最終回になりますので、私自身も1年間の思い返ししながら、振り返っていきたくと思います。

私の留学先であるチューリッヒ大学のClinic for Reconstructive Dentistryは、Ronald Jung 教授、Daniel Thoma 教授を中心に、コンベンショナルな固定性、可徹性補綴装置はもちろんのこと、インプラント治療、それに必要な骨造成、軟組織造成に加えて、IOD、ベニアなどの審美治療、インプラント周囲炎など、数多くの臨床が日々実践されておりました。

私自身はOberarztと呼ばれる上級医以上の先生たちの外科処置を全てアシストさせてもらいながら、さまざまな臨床を目の前で見ることができました。特にJung 教授はまるで私一人にLive surgeryをしているかのように質問を投げながら、細かな勘所やコツなどを解説をしてくれて、とても贅沢な経験でした。チューリッヒ大学に限らず、スイスではデジタル技術の活用が進んでおり、インプラントシミュレーション、サージカルガイドの作製、補綴物の印象、作製、軟組織の変化などに用いられており、従来のアルジネートやシリコーンなどを用いた印象採得は1年間で見ただのは数回くらいで、院内ラボの作業机にも石膏模型はほとんど見当たらなかったことは驚きでした。



主任教授である Ronald Jung 教授



実質的に一番お世話になった Daniel Thoma 教授



外来でのオペのアシストの様子

研究においては、インプラントの埋入プロトコルや顎堤保存術に関する無作為化比較臨床試験の研究プロジェクトに参加させてもらい、その研究成果を学会発表する経験もできました。

1年間という短い時間でしたが、なんとか論文投稿まで進めることができ、留学中の仕事が形になることをとても嬉しく思っています。

私自身、留学前は東京医科歯科大学歯周病学分野に在籍し、大学院時代からさまざまなバイオマテリアルを用いた硬組織、軟組織の再生をテーマに前臨床研究、臨床研究に従事していたため、留学先での取り扱う臨床に直結した研究テーマは、私の興味、関心とマッチしており、非常に楽しく、実りあるものになりました。

特に驚いたのはインプラント、補綴治療に関する臨床研究が随時 30 プロジェクト以上遂行されており、それがシステムとして出来上がっていたことです。

こういった情報は、論文を読んでいてもわからず、実際に現地でその様子を目にしないとわからなかったので非常に有意義な経験となりました。

この一年間でスイスの歯科医療や教育システム、医療制度の違いなどを肌で感じることができました。

日本と比較してみた時に、どちらかが優れている劣っているというのも一長一短で難しいですが、日本の臨床医、歯科技工士の技術の高さ、こだわり、繊細さなど全く世界に引けを取らないレベルだと思います。

しかしながら、言語や論文執筆などの壁によって、世界に向けた発信やアピールはあまりできていないように感じます。

世界における日本の歯科医師、歯科界の存在感、プレゼンスをあげていくには、こういったことをひとつずつ積み重ねていく必要があるように思いました。留学経験者として今後は日本の優れた部分をしっかりと世界に向けて発信できる歯科医師になれるように努力していきたいと思っています。

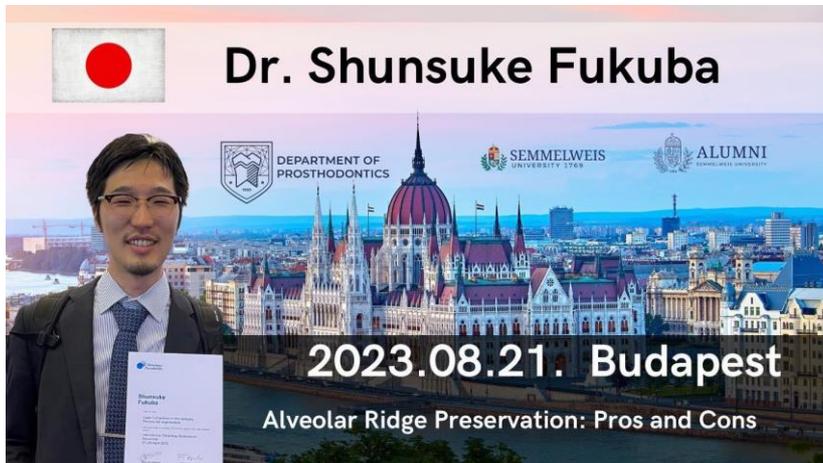
また1年間という短い期間でしたので精力的に国内外の学会やセミナーに参加し、多くの先生方と知り合うことができました。

今回の留学での個人的な一番のハイライトはバルセロナで開催された学会においてケースコンペティションに選抜してもらい、会場で自身の症例を発表することができたことです。残念ながら優勝はできませんでしたが、日本から来ていた先生たちにも応援していただき、忘れられない経験になりました。

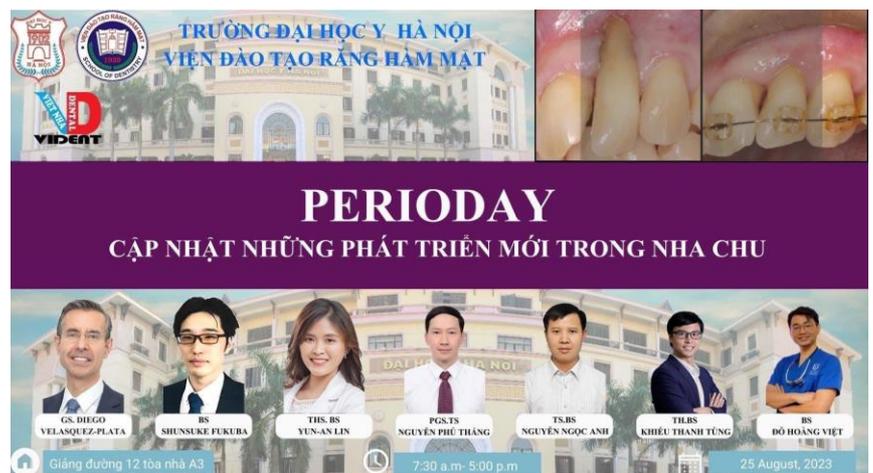


バルセロナの学会でのケースコンペティションの様子

その発表をきっかけにブタパストやハノイなどの先生から講演の依頼をいただいたり、自身の友人の輪が大きくなるきっかけになったと思っています。



ハンガリーの Semmelweis 大学での講演の様子



ハノイ医科大学の講演の様子

スイスは非常に物価が高いことで知られ、さらに円安の影響もあって、経済的には苦しい状況でしたが、そのかわり日本と同じくらい街は清潔で治安も良く、アジア人だからという理由でなにか嫌な思いをすることなく快適に過ごすことができました。

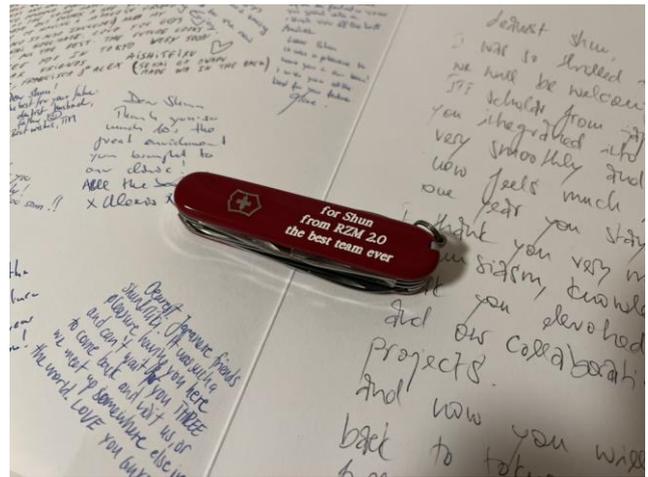
周囲にはドイツ、フランス、イタリアに囲まれ、ヨーロッパの中心に位置し、いろんな文化の影響が感じることができました。またどこへ出かけるにも数時間で着くというロケーションで、留学中、常にサポートしてくれた妻も、非常に楽しく日々を過ごしていたようです。

日本人に近いといわれる、はっきりものを申すというより空気を読む国民性の優しいスイス人の同僚たちにも優しく迎えていただき、たくさん思い出ができました。

帰国の際にはサプライズでプレゼントと花束をもらい、後ろ髪を引かれる思いで帰国の途につきました。



最終日にサプライズでプレゼントをいただいた



同僚からのメッセージとスイスで有名なアーミーナイフ

この1年で非常に多くのことを学ばせてもらいましたが、一番の財産は人との出会いとつながりであったように思います。

自分の中でスイス、チューリッヒは特別な国、街になりましたし、今後も国際学会などで友人たちと再会したり、公私ともに今後も交流を続けていきたいと思ひます。

実際に Jung 教授が 11 月に日本でセミナーとハンズオンをしに来日されるのですが、そこでアシスタントとして抜擢していただいたり、仲良くなった友人家族が年末に尋ねてきてくれたりと、今回の留学がいろいろな素敵なお縁を運んできたくれたことに感謝しております。

また今回の留学をきっかけにチューリッヒ大学と共同研究もいくつか計画しているのでそちらも非常に楽しみです。

現在、スイスのバーゼル大学に 2 名の日本人 ITI Scholar の先生が留学されており、私の前年に留学されていた先生を含めると 3 年連続で日本人のスイスの大学への留学が続いております。

今回の ITI Scholarship を通じて、この大きな ITI Family という輪に入り、日本と世界との架け橋としてさらに発信していきたいと思ひと共に、今後、留学に興味のある先生方に少しでも何か力になることができたらと思ひております。

今回の経験で得られたことを糧に、目の前の患者さんをはじめ、自身の研究活動、そして国内外に少しでも還元できるように、引き続き頑張っていきたいと思ひます。

最後になりましたが、このような貴重な機会を頂きました ITI Section Japan 関係者各位の皆様、そしてなにより共に苦楽を共にし、サポートしてくれた妻と両親に心より感謝申し上げます。

そして今後の ITI Scholar の先生方の益々のご活躍と ITI Section Japan の発展を心よりお祈り申し上げます。

1年間、この ITI Scholar 通信を通して私の体験記にお付き合いいただき、また温かい応援の声をいただいたことに改めて深く感謝いたします。



スイスの名峰 マッターホルンを臨んで

ありがとうございました。

